

## 訳者解題

金 閻愛

本論文は、2014年2月20日東京外国語大学にて行なわれた国際シンポジウム「民衆の記憶と東アジアの民主主義——サバルタンの声を聴くこと」の基調報告原稿である。日本ではあまり知られていない、否、韓国においてですら民主化運動を扱う文脈ではまったくと言っていいほど忘れ去られている「一家殺人事件」、この事件を通じて韓国現代史を振り返ってみるといふことは何を意味するだろうか。

著者は文頭に「復帰」ということばを用いている。日本語としては耳慣れない用法なので、直接著者に問い合わせをしたところ、「過去に起きた事実、記憶などを調査して、再び省察的に記録すること」だという回答が来た。だとすれば、筆者が一家殺人事件を通じて光州と莞島をつなげて「再び省察的に記録」しようとしたものは何であったらうか。さらにそのために方法的に用いた「聞き取り調査」は一体何を「語りだす」だろうか。

このような歴史叙史的課題とも交錯する本研究は、韓国の公的な歴史のみならず民主化運動側によってもこれまで省みられず記録されなかった人々の口述をもとに、その記憶に寄り添うという形で進められている。

まず、著者について簡単に紹介すると、金元（キム・ウォン）氏は韓国中央研究院社会科学部の教授で、専攻分野は、労働史、口述史、そして1960-1970年代の韓国現代史である。著書には、『朴正熙時代の幽霊』（2011）、『忘れられたものについての記憶』（2011）、『87年6月抗争』（2009）、『消え去った政治の場所』（2008、共著）、『女工1970、彼女らの反歴史』（2006）などがあり、主要論文として、「サバルタンはなぜ沈黙するのか：口述、記憶そして再現を中心に」、「未来は長続きしない：朴正熙時代における近代化の中で忘れられた物語」、「1987年以後進歩的な知識生産の変化」、「文化、ジェンダーそして世代的な差異についての研究：社会運動活動家についての口述資料を中心に」、「Memories of Migrant labor: Stories of Two Korean Nurses Dispatched to

West Germany」などがあり、朴正熙時代をはじめ韓国現代社会において民衆またはサバルタンという存在が起こした事件や彼/彼女らの記憶が、どのように現在化され、再現されたのか、そして知識人がサバルタンをどのように認識し、共感してきたのかについて一貫して研究を続けている人物である。

本稿の議論は、朝鮮戦争と80年5月光州民主化運動という出来事を連続線上において、それを語る現在の記憶に焦点を当てている。一見するとこの二つの歴史は、そのつながりが明確に見えるものではなく、韓国現代史が抱えている暴力の記憶として、もしくは民衆の記憶として語られることが多かった。しかしながらこの論考はチェ・ドッチュンという人物を通じて、朝鮮戦争と80年5月がいかに密接に関連しているのかについて改めて考えさせるものである。さらにここで展開されている議論の意義は、学問的研究において連想されることがなかった二つの歴史を連結しその関連性を明らかにしたことだけでなく、それらを記憶している今の人々の語り

に焦点を当てたことである。ある詩人の幼年期の経験とかすかな記憶、そして同僚の提案によって始まったこの研究は、一人の男が生き、そして殺害された1980年5月という時間と空間がもつ謎を明らかにするために、日本の植民地期や朝鮮戦争期へと遡りつつ、彼の経験を探っていく。しかし、ここで目論まれていることは、その人物の過去の経験の再構成ではなく、それを記憶し語っている人々の「現在」のほうにある。つまり、「今、ある記憶が語られる」ということは、単純に記憶を通じて当時が再現されるのではなく、現在それをどのように記憶しているのかという現在性が問われるのだ。そして、記憶を語るということが、もう完了した話を語るのではなく、「今、どういう状況においてそれらが語られるのか」ということを考えなければならない。

例えばこの中で、過去について語ろうとするとき、躊躇してしまう人が登場する。その人が

躊躇した理由を私たちが安易に単純化してしまうことは慎まなければならないが、もし一つ想像してみるとすれば、「左翼」や「アカ」という言葉で表されるものに対する、ある種の恐怖による躊躇であると考えられるだろう。周知のように、現在韓国社会においてこうしたタームは、人々の口を閉ざし、記憶を抹消するような破壊力を持っている。チェ・ドツチュンが朝鮮戦争前後の混乱期を生きのびることができたとはいえ、「左翼活動」に関わりをもった過去を持っていることも事実である。こういったチェ・ドツチュンの過去についてチェ・ドツチュン自分自身であれ、遠い親戚であれ、語るができない、口に出すことを躊躇わせる暗黙の前提が、いまだ存在し続けているといえよう。またそれは、チェ・ドツチュンの「左翼活動」について、それは思想ではなく、「小僧」の「火遊び」に過ぎないと繰り返しているところにも同じ心情的機制が認められるように思われる。

そして、チェ・ドツチュン一家の殺人事件は、光州民主化運動と関連性を持っているのにもかかわらず、そこから消されてしまった記憶でもある。80年5月に行われた光州民主化運動は、1997年に国家記念日になった。これによって公式的にも民主化運動として記憶されるようになり、「アカ」、「暴動」などのことばで呼ばれていた人々が報われるようになった。こうした韓国現代史の展開のなかで、チェ・ドツチュンの息子チェ・ Chol が示威中に手に入れた銃で家族を殺害した事件は、民主化運動とは何の関連もないように思われるかもしれない。しかし、著者が言うように、チェ・ドツチュンにとって80年5月光州での戦いは、彼自身が経験した朝鮮戦争と重なって、それによる恐怖から息子を叱るようになり、それが殺人事件につながったわけであって、まさにここにこそ韓国という国家の歴史、さらには東アジア現代史における「歴史の襲」を読み込まなければならない。さらにこれは80年5月の光州が民主化運動の聖地として位置づけられる際に、忘れ去られてしまった人々の記憶を拾い集める作業でもあるのである。

結局、この殺人事件は、単純に個人の倫理性の問題として処理されてしまい、民主化運動の文脈においてもまったく語られていない。しか

し、チェ・ドツチュンという人物の生涯を辿っていくことによって、この事件は韓国のある地域で起きた個人的な恨みを晴らす殺人事件としてのみ捉えられるものでなく、その背後に日本の植民地期から朝鮮戦争期までのチェ・ドツチュンの経験、そしてその経験から生まれた重荷を抱えながら韓国現代社会を生きようとした「父」の姿という別の位相を見出すこともできるだろう。そしてこの「父」の姿とは、まさに東アジアの現代史の抱える問題でもあったのだ。金元氏の議論は公式的な歴史では語られない「沈黙する民衆」の声を拾った議論であり、そして韓国という「一国史」という境界を越えようとする第一歩であると考えられる。

(きむ うね・東京外国語大学大学院博士後期課程)